

歴博くらしの植物苑だより

くらしの植物苑観察会 13:30～ くらしの植物苑 東屋

第103回 『江戸・東京の野菜』加藤陽子（荒川ふるさと文化館）

先生は荒川区を中心に、江戸と近郊農村、都市流通を野菜を切り口に古文書、浮世絵などから考察されておられます。

第104回 『江戸の菊』 平野 恵 （文京ふるさと歴史館）

先生は19世紀の日本の園芸文化を文書、浮世絵などからご研究されています。今回は江戸時代の菊の観賞の仕方や描かれた江戸菊、菊の栽培書などを紹介いただきます。

くらしの植物苑今週の見どころ 毎木曜日更新 <http://www.rekihaku.ac.jp>



「伝統の古典菊」

2007年10月30日（火）～12月2日（日）

10月30日（火）13:30 からくらしの植物苑東屋前にて、「伝統の古典菊」の企画説明会を行います。展示プロジェクト委員の先生の解説もあります。ぜひご参加ください。また9:30からは古典菊の伊勢菊・嵯峨菊の有償頒布（1000～2000円）も予定しています。数に限りがありますのでご了承ください。

古典菊といわれる、嵯峨菊・伊勢菊・肥後菊・江戸菊を、1999年から収集し始め、古典菊を見ていただきました。菊は日本の園芸植物の代表といってもいいくらい、花として、紋様として、私たちの生活のなかに深く関わっています。観賞用の菊は中国でのハイシマカンギクとチョウセンノギクが深くかかわったと考えられています。その菊が何度も、中国の文化・思想とともに日本に渡ってきました。日本の文化や生活の中に溶け込んで、日本独自の菊を作り上げてきました。日本独自の菊を作り、また栽培法、観賞法までも作りだしました、それが古典菊の世界です。

アケビ （アケビ科アケビ属）

山野に普通に生える、つる性の落葉木本です。小葉は5枚、花は雌雄異花で4月の今週の見どころにあります。熟すると果実が開くことからこの名があるといわれています。この木は2001年にオランダのライデン大学付属植物園から寄贈されたもので、今年初めて果実がつけました。



花卉のように見えるものは、実はがく片です。

コブナグサ (イネ科コブナグサ属)

田の縁や草原に生える1年草。葉の形が小さなフナに見えることからその名があります。八丈島ではカリヤスと呼びます、黄八丈は本種の煎じた汁とツバキの灰で発色させて絹を染色したものです。



チャ (ツバキ科ツバキ属)

幼葉を摘んで加工し、お茶・紅茶などとして利用します。通常は2変種に分類され、寒さに強く、背たけが余り高くなく、葉が小さくて丸く緑茶に適する、中国種。寒さに弱く、高木になり紅茶に適するアッサム種があります。12月4日からは、この仲間の『冬の華・サザンカ』展が開催されます。



ヒガンバナ (ヒガンバナ科ヒガンバナ属)

本来9月ころに花を咲かせますが、苑内の花はやっと咲き始めたばかりです。花が咲くときにはまだ葉はありません。日本のヒガンバナは3倍体なので種子はつきません。鱗茎はでんぷんと毒性があります。



シロバナヒガンバナ (ヒガンバナ科ヒガンバナ属)

白い花を咲かせ、花被はヒガンバナほどは外側に反り返りません、葉もやや幅が広い。ヒガンバナとショウキズイセンとの交雑と考えられています。



今の見どころ：

